

# 春夏施肥によるスモモ「カラリ」の開花不良軽減および増収効果

秋冬期に施肥する慣行の体系から春夏期に変更することで、慣行より花数が多くなり、増収する

## 背景・目的

- 奄美地域のスモモ「カラリ(花螺季)」では、近年、秋冬期の高温による開花不良等の被害が顕在化
- これまでの秋冬期に年間窒素量の80%を分施する施肥体系では、秋冬期の高温が窒素の肥効に影響し、開花不良を助長
- 秋冬期中心の慣行の施肥体系から、春夏期中心の施肥に変更し、生産量の低下を軽減できる技術を検討

## 成果の内容

- 休眠期の11月と12月に年間窒素施用量の40%ずつを分施する慣行の秋冬施肥に対し、開花期の2月と収穫後の7月に、年間窒素施用量の40%ずつを分施する春夏施肥を開発
- 春夏施肥への変更により発芽率が高まり、花数が多くなり、増収する
- 春夏施肥への変更は、開花盛期、収穫盛期、果実品質に影響しない

春夏期を中心とした新たな施肥体系



注1) 6月は燐硝安加里(S-226)を、その他の月は奄美果樹配合(8-8-5)を施用。  
2) ( )内の数字は時期別の施用割合を表す。年間窒素施用量は両区とも12kg/10a。

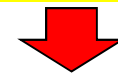
施肥時期の違いと発芽率、花数および収量 (R3~5)

施肥時期	発芽率(%)	花数(/節)	収量(kg/樹)	開花盛期	収穫盛期
秋冬施肥	42.0	0.46	10.3	2月15日	6月1日
春夏施肥	49.9	0.79	14.9	2月16日	5月31日

注1) 3年間の平均値。発芽率および花数は両区とも1樹当たり短果枝100本を調査。  
2) 発芽率: 花または新梢で発芽した節数/総節数×100、花数: 総花数/総節数  
3) 収量: 果実品質を調査した果実重の数値と収穫果数から換算  
4) 赤色で示す数値は秋冬施肥に対し統計的に有意な差が認められる。

## 期待される効果

スモモ「カラリ」の花数の確保により着果が安定



「カラリ」の生産安定、所得向上



○普及対象・範囲: 奄美地域のスモモ「カラリ」生産者

鹿児島県農業開発総合センター  
大島支場亜熱帯果樹研究室 (R05)